

葛西善蔵の研究 (二)

大森澄雄

その一 性 格

大正七年五月、雑誌『大学及び大学生』に発表された「兄と弟」という作品がある。これに登場する作家志望の兄を△庄作▽といい、その弟を△茂▽というが、これらのモデルが葛西善蔵と実弟勇蔵であることは、疑う余地のない程歴然としている。しかも兄と弟の性格が対蹠的(事実もそうでもつたが)に描き出されているために、語りは庄作の性格が鮮明に浮き彫りされているために、この作品は、善蔵の性格を追究する上での極めて好都合な手懸りであると、いうことができる。

「兄と弟」のストーリーは、この兄弟の生活、中でも特に二人の生活観・人生観の相違に集中しているが、悪意に満ちた態度で、庄作を小説「赤裸々の愛」のモデルにした△B▽という作家が、途中と最後の部分で二度顔を覗かせる。兄弟の生活を中心とするストーリーと△B▽に関するそれとは、作品全体のストーリー上での結合

が、可成り稀薄であるが、作者葛西善蔵の思考過程を考慮する時、全く無関係であるとはいえないのである。しかしここで、庄作の、即ち善蔵の性格を、成る可くスムーズに追究するための、予備的な工作として、まず「兄と弟」のストーリーの、殊に兄弟に関する部分を、できる限り簡略に整理することから手懸けたいと、思うのである。

それは——秋田県山奥で運送兼鉱山業を営んでいた茂が、左前になつた事業の最後の挽回策として、硫化鉄を、これまで仲買人の手を経て東京の間屋に入れていたのを、直接入れることによつて、中間搾取をなくし、少しでも好転させようという希望を抱いて上京してくる。しかしこの上京を債権者達は△故意の逃亡▽と見做し、これまでの債権関係を強引に整理しようとして追ってくる。やむなく一旦帰山した茂は、一切の始末を付けた上で、家族を伴つて(但し、妻のみ)再び上京し、庄作のところに同居する。茂は庄作と相談の結

果△硫化鉄の明細な予算表▽を作り、共同出資者を求めて、庄作の知人の間を一緒に訪ね回る。折よく△電気機械のブローカーをしてある技師上がりのTといふ男▽が、庄作の友人の紹介でこの話に乗り気になり、しかも庄作らのそれより一層大規模な計画を提案する。しかしそれも東の間、△T▽は、庄作らに△一言の通知もなく▽、△九州のある会社へ技師として赴任してしまふ。一攫千金の夢は破れてしまふ。茂はやむなく、この二家族を養うために、年の暮迫つてから植木職人の手下として、正月にはいつてからは電車の車庫で土工として黙々と働く。この何の野心もない、諦めに近い生活をしている茂を見ると、庄作は胸が痛む。二月になつて、茂の妻の兄が、商用で神戸に行く途中、訪ねる。彼は、妹らの生活の貧しく悲惨なのに驚いて、茂夫婦に帰郷を勧める。茂ははじめ、妻のみを帰し、残留を決意するが、最後に翻して一緒に帰郷する。庄作は、妻の兄の下で働かねばならぬ茂のことを、病(喘息)床で、△「可哀相な馬鹿者……」▽と呟くが、それは、△茂に云ふともまた斯うした業病の自分に云ふとも解らない気持で▽あつた——というのである。これを事実(小山内時雄氏編『弘前文学』32号所収年

譜。碓ヶ関村役場保存の葛西卯一郎戸主の戸籍謄本。昭和三十九年十二月二十七日の佐藤榮七氏の筆者への談話。昭和四十年一月十三日附葛西つる未亡人の筆者への私信)と照合すると、両者は大筋に於て殆ど距離がないようである(注1)。勿論、「兄と弟」は小説であつて、事実そのものではなく、また事実そのもののように見える部分でも、善蔵の心境に合致しない点は、彼の眼鏡に合うように歪曲されたり、削除されたりしていることである。しかし善蔵の場合、例え小説上の虚構であつても、それは彼の心象に忠実な描写の結果であつて、言わば彼には、多くの場合彼なりの歪曲を通してしか物を観ることのできない偏執性があつたと、見るべきである。善蔵の事実の描出に、彼に都合のいい歪曲のあることは、それに遭遇した友人達によつて、既にいい古されてきたことであり(注2)、作品を一応通読すれば、予備知識がなくとも漠然とながら感知できることである。

庄作と茂の性格が、二人の相對關係の中で自然の形で現われるのは、硫化鉄の販売が成功しそよになつた時、日比谷の近くの△T▽の事務所を出て或る洋食屋にはいり、捕らぬ狸の皮算用宜敷く二人の交わす会話である。

△「併し、僕達がいよいよ成金となつたとするね、併



し僕には結局成金といふことは問題でないが、お前は  
何うするかね？ やはり無限に無限に富を殖やして行  
つてカーネギーとか日本で云へば三井とか大倉とか浅  
野とか云ふやうな人間になりたいと云ふのかね？」

「いや別にそんなやうなことも考へません」

「……ふむさうかな。それではやはり何か。この  
辺の斯うした店屋の一軒も持つて、氣楽に一生を過し  
て行かれればそれで好いと云ふ訳かね？」

「まあさうですな。何うと云つて他に考へやうもあ  
りませんからな」

「……解らないね、僕には。僕にはそんな氣持であ  
て、克くこの世の中が退屈にならないのが、不思議の  
やうに思はれるね。毎日同じやうな細かしいうるさい  
ことに屈托して、天氣が好いとか悪いとか云つて、さ  
うしてこの一生が経つて去つて了ふのかと思ふと、僕  
には堪らない氣がするがね。物質的なことでも同じだ  
そしてまたそれが永久に実現されない空想でちつても  
好いが、兎に角さうした要求の氣持を常に燃やしてな  
いと、僕はこの世の中が、日々が、苦痛で堪らない氣  
がするよ。尤もお前にしても明日にも一萬円の成金に  
なれば、またその上の十萬円百萬円と忽ち慾望が大き

のである。

上記の会話の直前に、硫黄鉄の販売の成功を予想した  
庄作が、△ほんの三日でも好い、一日でも好い、ブーブ  
ー自動車に云はして、傲然として浮世の有象無象を蹴散  
らした氣持になられたら、決して悪い氣持ではない△と  
ひどく大人氣ない、世俗的な空想を夢見る場面がある。  
しかしこの空想は、△人間は無限の欲望に活きなければ  
ならぬ、永遠の要求に活きなければならぬ、だから若し  
それが出来なければ自分なんかだからとて、自動車に乗ると  
いふことは不思議なことでもないし、またこんなこと位  
で真の要求を持つた人間が墮落すべきでない△彼は昂然  
として、斯うした空想を拵けて行つたりした△という様  
に、副次的産物であり、△真の要求△の一時の代償に過  
ぎないのである。△真の要求△が△永遠の要求△（注ろ  
）であることに変わりはないのである。このことは、△ま  
たこんなこと位で真の要求を持つた人間が墮落すべきで  
ない△という表現を見ても、明らかである。

この小説のはじめの部分に、△秋田△の鉢山町の茂の  
ところからの帰途、ちようと八郎湖畔の辺りで夕焼け  
に会つた時、その△自然の芸術△の大きさ、輝やかしさ  
に、眩惑され△、△大自然のそれに一寸でもあやかるこ

くなつて行くのだらうが、併し僕には最初からその一  
番大きな欲望が必要なんだね。さうした絶対な氣持が  
必要なんだね。それがお前のやうな氣持なんだと、僕  
にはひどく張合がない……」△

これらの会話文のそれぞれが誰のものであるかは、明  
示しなくともはつきりと理解できる筈である。無限の要  
求・欲望を常に燃やしていないと、△この世の中が、日  
日が、苦痛で堪らない△という人生觀を開陳するのが、  
庄作であり、反対に消極的でしかも現実的な意見を言葉  
駁に述べるのが、茂であることは、今更いふまでもな  
いことである。

上記の会話文によると、庄作は平凡な日常生活に、虚  
無と倦怠をしか感ずることのできない人間である。そこ  
で彼は、常に無限の要求・欲望に生きようとする。しか  
もそれが、例え△物質的なことでも△、△永久に実現さ  
れない空想であつてもよい△と、いう。兎に角庄作は、  
現実のささやかな幸福に満足することにも、徐々に欲望  
を拡大して行くことにも不満で、実現されなくとも、△  
最初からその一番大きな欲望△を抱かねばならぬという  
△さうした絶対の氣持が必要△であり、茂の様に現実  
に甘んずるといふ態度には、△ひどく張合がない△とい

とが出来るとせば、自分の一生もまた生甲斐のあるもの  
であり、自分の生命も無駄で無いといふことを思つて、  
彼の惨めな都会の生活に帰つて行く自分に新しい元氣を  
感じた△という、庄作の感動の描き出されている場面が  
ある。この時の庄作の感動が、この△自然の芸術△の「  
壮大さ」。「素晴しさ」に魅了された感動であることは  
いふまでもない。そこで庄作は、△大自然のそれに一寸  
でもあやかることが出来るとせば、自分の一生もまた生  
甲斐のちるものであり、自分の生命も無駄で無い△と思  
つて、△惨めな都会の生活に帰つて行く自分に新しい元  
氣を感△ずることができたのである。庄作が窮迫した生  
活に能く耐え得ることができたのも、また茂の帰郷に伴  
つて更に窮迫した時、△現在このまきを信じなければ△、  
△現在のままで燃えて行かなくては△、△本道の道と云  
ふものは開けるものでない△と、妻に超然とした態度で  
傲語できたのも、詰りは彼が、八郎湖畔で夕焼けを眺め  
た瞬間に終ることなく、芸術の持つ魅力に、常に強く  
誘引されていたからであらうと、想われる。事実、庄作  
の现实生活は、彼の芸術的精進のための犠牲に供せられて  
いる。それ程庄作は、芸術に執心しているのである。以  
上の如く、庄作の生活や言動や志向を眺める時、彼のい



う、眞の要求Vは、彼が特に、芸術生活の面で燃え立たせた、永遠の要求Vであることが、明確になつてくるのである(注4)。この様に庄作は、理想に生きることに生甲斐を感じる人間なのである。

硫化鉄の販売計画が失敗に終つたのち、土工という職にありついた茂が、苦しい労働にもめげず黙々と働いているのに、優しい労りの言葉をかけながらも、俺にはどうも、お前のさうした気持は、解らないVと、嫌味に等しい口調で、庄作が説教を始める場面がある。そこでは、まず、成敗といふことは別問題Vとして、茂が無限の願望Vを持つていないのを窘め、次に、秋田Vの鉱山で破産した時の優柔不断な態度の「非」を論じ、更に、決してお前を責めるつもりから言つてゐるのではないVと断りながらも、庄作らの生活を補助してきたこれまでの茂の行為が、俺に対する受身の悲しい諦めめりの気持からして呉れたんだとすると、僕は非常に気が咎められない訳に行かないVと、逆にいじめる結果に終つてゐる。茂は、これに対して、庄作の様に強い願望をどうしても燃え立たせなければならぬVとは考えていないこと、また、世の中には、どうしても理屈ばかりで押せないやうなこともあるVことを述べ、更に、従順

対して、それに勝る回答のできなかつたのは、結局、彼の意見の、独断的で飛躍的な点にあつたと、考えられる。庄作の、こうした性向は、茂との共同生活での他の面でも、見ることが出来る。茂の妻の兄宮川Vが、茂夫婦に帰郷を勧めて神戸に発つたあと、庄作が茂の意志を確認する場面がある。その時、茂の(恐らくは庄作の手前)「私はどつちにしても当分は帰らないV」という意志表示に、庄作は、

「僕もその方が賛成だ。今度はまた宮川の世話になつて、今度もまたさうした因縁を頼つて何うしようといふ考へは、一番宜しくない考へだ。お前の身体は今自由だ。(中略) これからは身体一つを資本にして、本當の独立した自分の生活を開くべきだね。(中略) 物質的にも思想的にも何物かに悪因縁を結んだり隷属したりしてゐる生活は、最も卑しむべき生活だからな。それを今日までお互にそれが娑婆の方便だ、利用だと云つて自分に許して来た結果が、お互ひのこの今日の日詰りを作つたのだからな……」V

という意見を述べる(注5)。庄作は、この時、自分の生活が、悪因縁の生活Vであることを、一応認めはするが、主眼点は茂の生活態度にある。また庄作の自己批判

な弟としては珍しく、強い気持Vを持つべきだと考えたり、そういう気持で毎日生活できるのなら、どうして生活のことに煩わされないで、創作なり何なりへ取りかかるとかV、またその気持が誰にも必要だと思ふなら、どうして往来へなり出てもそれを世間へ伝えることにしないのかVと、庄作の意見の現実遊離の欠陥を衝いて反駁している。しかし庄作は、詰るところ、自分も元来は弱い人間だからVという逃げ口上と、生活上の苦患Vに、全く悲しく諦らめた心持で耐へ忍んで居るのVと、強い要求を持つてV現在の苦患に反駁してゐるのとは、その根本の精神に於て違ふVというこれまでの繰り返しの、この活きた現実の都会の生活に遁入つて行かうといふお前としては、お前の現在の心持では、僕には余りに傷ましく感じられるVという庄作自身にいつた方が却つて適切な、矛盾に満ちた忠告をしか、できないのである。庄作と茂の性格の対照面は、既に判然としていたことであるが、ここに至つて、消極的な態度を示か表明できない茂の方が、社会的に、遙かに経験豊かな、適応性のある人間であることが、はつきりするのである。それ故茂は、庄作の意見の弱点を、落着いた態度で、しかも鋭く衝くことができたのである。庄作が、これに

は、極めて表面的で、思想的にVは兎も角、物質的にVは自ら独立した生活Vをしようとする意志もなく依然茂の収入に寄食する心積りと、想われる。この点庄作の思考態度は、甚だ自己本位といふべきである。さきに、庄作の意見の、独断的で飛躍的な点を指摘したが、そこでは、無限の欲望Vの有無が、生活態度の価値基準として、強く主張されていたのである。しかもこの基準が、庄作にとつては絶対的で、根強く固執されていたことは、これまで見てきたとおりである。猶この基準にも、上述の欠陥の附随していることはいうまでもない。

ここに於て、庄作のエゴイズムと偏執性とを指摘できると思ふ。それは、庄作のVある先聲が彼に忠告したV、  
「君はいつもいつも、自分のことのみ本位にして考へて居るが、それでは幾らしたつて物の真実といふものの解りつこない。(中略) 若し君が何処までも現在の心持のまま押しで行くんだとすると僕は断言するね! そこには唯滅亡の谷が待つて居るばかりだといふことを……」V

といふ言葉と、これに対する庄作の、  
「斯う忠告されるにつけても、やはり何うすること



も出来ないやうな自分の生活に心持を想はない訳には行かないのでちつた。

次に、△B△Vに関するストーリーに移りたいと、思う。この小説に描かれている△B△Vは、△凡てを性慾の關係から割り出さずには物事を考へることが出来ない△、△サーニズムの実行者△(注6)である。この△B△Vが、△最近「赤裸々の愛」といふ題での創作を発表して、庄作等の貧乏生活を露骨に曝き出し△、△非常な興味を以て、庄作の病氣の原因を「つまり彼等は赤裸々の愛が強過ぎるのだ……」と断定した△が、実は、それは、△自分のした猥褻的行為を、反対に、庄作が喘息の発作と性慾の異常な亢奮に駆られては屢々細君に実行するのを見たといふやうに△、自分の猥褻的行為を庄作に転嫁して書かれた作品であると、いうのである。

独断を恐れず、卑見を大胆に述べるとすれば、△B△Vのモデルは広津和郎氏であり、「赤裸々の愛」のモデルは「神経病時代」でもと、私は想定する。

△B△Vと広津氏との關係は、類似性より隔絶性の方が遙かに強いのである。しかし、私が△B△Vのモデルを△が、しかし、愛のない家庭生活までは清算する決断力のない、「性格破産者」を描いた作品である。「神経病時代」で、善蔵がモデルにされたと思われる△遠山△は、経済觀念が乏しく、エゴイストツクな人間として描き出されてはいるが、主人公定吉からは、△フランクな、正直な△、決断力のある男として、羨望の眼を持つて眺められていたのである。悪意に満ちた態度で遠山が描き出されているところは、少しもないのである。しかし、△B△Vのモデルを広津氏と想定した以上、「兄と弟」の発表されるまでに、広津氏が善蔵をモデルにした作品は、私の調査した限りでは、「神経病時代」以外にないといふことと、また、「神経病時代」で遠山のいう、

△「(前略) 俺と妻との愛は着物や金が間に挟まった愛じゃないんだ。真つ裸かの愛だ。皮膚と皮膚との間に何もかも介在しない愛なのだ。着物や金が全部なくなつて、二人が真つ裸かになつた時、尚一層俺たちの愛は純粹になるのだ! ほんとだ、俺の芸術もやつぱりそこにある。(前略)」△

という言葉とは、「赤裸々の愛」のモデルを、「神経病時代」と想定するのに好都合な素材であると、想われる。しかし、上記の遠山の言葉は、実際の善蔵の言葉の忠

津氏と想定した根拠は、善蔵の他の作品(注7)及び相馬泰三(故人には敬称省略。以下同様)の作品(注8)「いわゆる「奇蹟派」の人達の作品」で、広津氏がモデルに扱われた多くの場合、或は「つきり」と「サーニスト」と命名され、或は「肉体的欲求の追求者」として描かれている点、また、広津氏自身、性慾上の過失のために苦惱する人物、或はそのために愛のない結婚生活にはいつた人物を主人公とした作品(注9)を、「兄と弟」の執筆までに二編程発表しており、事実、当時の広津氏の私生活も、これらの作品に描かれているのと殆ど一致している点、更に、小説「サーニン」の作者アルツイバアセフに強い関心を寄せ、早稲田大学の卒業論文に取り上げた(注10)ほか、『早稲田文学』誌上に、既に二回に亘つて評論を発表している(注11)点などであつて、この想定は、強ち無理ではないと、思われる。

「赤裸々の愛」と「神経病時代」の距離は、△B△Vと広津氏のそれ以上で、全く別物の感じがする。前者は、「兄と弟」によれば、庄作(善蔵)を主人公とし、その愛慾生活の描かれている作品といわれ、後者は、△鈴木定吉△(広津和郎)を主人公とし、勤め先の新聞社の腐敗に、激しい憤を感じ、苦惱の果に社を辞めてしまふ

実な再現であるか、広津氏の虚構であるか、その執れであるにしても、遠山夫婦の純粹な愛情の深さと、遠山の芸術的精進の激しさとを語るものではあつても、遠山の性生活の異常さを語るものではないのである。

「神経病時代」の遠山は、この様可成りの好意を持つて描かれているのに、どうして善蔵は、「兄と弟」の庄作をして悪意を持つて描かれたと想像させるように、創作するのであろうか。これは、善蔵の創作方法・態度上での、興味のある問題である。

ここで、「兄と弟」の発表された当時の、善蔵の周辺と、彼自身の精神状況とを、少し調べたいと思う。

大正の初期、善蔵が舟木重雄、相馬泰三、谷崎精二、広津和郎氏らと、同人雑誌『奇蹟』(注12)を出したことは、周知の事実である。九号で廃刊になつたが、これに賭けた、善蔵の情熱と期待とは、恐らくどの同人よりも大きかつたろうと、想われる(注13)。しかし、「兄と弟」の舞台になつた大正六年九月頃から大正七年二月頃までには、これらの同人のうち、まず、相馬泰三が、次いで、谷崎精二氏が認められ、更に、文芸評論家として認められていた広津和郎氏が、大正六年十月、問題の「神経病時代」を当時の検舞台『中央公論』に発表して



花々しくデビューしたのに、善蔵は寂しく、彼らの後塵を拝する形になつたのである。出世作「子をつれて」の発表されたのは、大正七年三月で、この時文壇の一部で認められはしたが、善蔵がクロイズ・アツプされたのは翌年三月、創作集「子をつれて」刊行以後のことである（注14）。それ故、「兄と弟」を執筆した大正七年四月も、発表した翌五月も、善蔵の精神状況は、「神経病時代」の発表された頃と同様に、文壇に出た友人に対する羨望と嫉妬と、取り残されたと思う不安の錯綜した、複雑な状況であつたらうと、想われる。

「兄と弟」の庄作の場合にも、△「赤裸々の愛」も、評判の良い作であつた△という様に、この小説で声名を馳せた△B△に対する羨望と嫉妬と、取り残されたと思う不安とが窺える。しかも庄作の深層心理には、確かに強い「劣等コンプレックス」が内在しているのを、見る事ができる。庄作は上述の如く△B△の私生活の劣悪さを執拗に発ぎ、「赤裸々の愛」が世間に歓迎され、△B△が△所謂理想とか芸術とか云つてゐる階級に容れられ△のを不審に思い、△今日のやうな、物質とか金とか才能とか、凡てが生活の方便といふことから割り出されて居る時代であつては、Bのやうな人間の存在も許さ

観上の優越感とが、強く張合つた形で、共存しているのである。

「兄と弟」の最後の部分に、庄作が、△ある寒い日の午後△、△三四ヶ月程前に、短い創作を△△ある友人の手から廻して貰つた△雑誌社を訪ねたところ、原稿を返えされ、惨めな気持ちになつて△あるカフェー△にはいつた時、そこに、△金持や貴族△出身の文学者達（注15）と一緒に來ている、△B△を発見する場面がある。ここでは、△B△は、これらの文学者達から貶まれた作家として、登場する。しかも、その中の一人（注16）からは「赤裸々の愛」を、△実に下劣△△醜惡な作△だと、罵倒される。これを見て、庄作は、△すべての存在は悲しいBもまたその一人であつたのだ△と、感傷的な気持ちになつて、△夕暮の迫つて來た寒い往來△へ出、△何者かに対する深い哀願の念に迫られて△、帰郷した茂の名を△心の中に叫び出す△という、如何にも感傷的な結末で、この「兄と弟」は終つてゐる。

さきに、この△金持や貴族△出身の文学者達のモデルを推定した（注15・16参照）が、その中の一人によつて、「赤裸々の愛」のモデル「神経病時代」が、△実に下劣△△醜惡な作△だと、事実罵倒されたか否かは別問題

れるだらう△が、△併し時代が進んで、精神とか良心とか本心に深い存在に就て自覚が出來て、この責任と誇りに対して敏感になればさう云つた時代が來ればBのやうな人間から爪弾きされるといふだけのことで済むまい△、△さうした時代になつては、無論立派な決闘問題だ。Bを殺さなければならぬのだ△という、△B△に対する攻撃的な感想に耽つたりする。これは、単純な嫉妬といえよそれまでであるが、しかし文学上の僚友△B△が、「赤裸々の愛」で名声を勝ち得たことによつて生じた、劣等コンプレックスに基因する無意識的な攻撃と見做すべきであらう。

庄作の「劣等感」は、処世上・実生活上のものであつて、人生觀上・文學觀上のものでは、決してない。それは、さきの庄作の感想を見れば、明らかである。というより、庄作は、人生觀上・文學觀上では、「優越感」を持つていたといえる。それは、庄作の、△精神とか良心とか本心に深い存在に就て自覚が出來て、この責任と誇りに対して敏感にな△る△時代になつては、無論立派な決闘問題だ。Bを殺さなければならぬのだ△という、上記の感想に、はつきりと現われている。この様に、庄作には、処世上・実生活上の劣等感と、人生觀上・文學

として、「赤裸々の愛」の罵倒されるのを見た時、庄作は一躍、△すべての存在は悲しいBもまたその一人であつたのだ△と、結論付けてしまふが、そうしなければ、庄作の劣等感恐らく補償され得なかつたらうと、想われる。

庄作の場合、この劣等感の代償として、優越感が生じたと考えられる。それが更に、極端な「自己過重評価」となるのである。これまで見てきた様に、茂の収入に寄食しながら、独断的な人生觀を押しつけがましく茂に語つた庄作の心理、△B△との△決闘問題△だの、△殺△すだのと心の中でおめいた庄作の心理には、強烈な優越感・自己過重評価とは裏腹の關係で、劣等感をも諷みとることが出来る。詰り庄作の偏執性は、処世上・実生活上の劣等感と、その代償として生じた人生觀・文學觀上の優越感と自己過重評価とに、強く支えられているのである。

以上、「兄と弟」を分析した結果、庄作の性格を形成する、「理想への強烈な憧憬」・「エゴイズム」・「偏執性」を指摘したが、これらが善蔵の性格特徴として、スムーズに移行できるか否かを、善蔵をモデルにした善



蔵自身及び善蔵の知人の小説、知人の善蔵回想記、ゴジツブなどによつて、調査したいと思う。

「兄と弟」以前に発表された小説に、「贖物さげて」(『早稲田文学』、大正六年二月、のち『贖物』と改題)がある(注17)。主人公公耕吉のモデルは、いうまででなく善蔵であるが、この作品も亦、「兄と弟」の庄作の性格を形成する上記の、三つの性格特徴が、ここでは耕吉の性格特徴として、そつくりそのまま描き出されている点から、善蔵の性格を追究する上で、「兄と弟」同様に重要な位置を占めると、いえよう。

「贖物さげて」のストーリーは、耕吉に纏わる事件の描かれているという点では、一貫性はあるが、しかし、東京で食い詰めた作家志望の耕吉が、△新生活△を夢見て故郷(青森)に帰り、山藤のちばら家を借りて、老父や△秋田の鉱山町で商売をしている弟の惣治△の仕送りを受けながら、創作への期待の中に、暫くぶりで妻子と生活を共にするという「前半」と、△第二の破産状態に陥つ△た惣治から、△叔父から千円ばかりの額の掛物類を借り出したから、上京して処分して呉れ△と頼まれそれらを携えて上京したところ、凡てが△贖物△であつ

の嫌悪の対象とさえなるのである。

山藤のちばら家に、妻子と共に落ち着いた耕吉は、△頼りに生命とか、人類の運命とか、神とか愛とか云ふことを考へようとし△、また、△自分のことを、「空想と現実との惨ましき戦をたたかふ勇士ではあるまいか」と△、思い、更にこの生活を、△今や現実の世界を遠く脚下に征服して、おもむろに宇宙人生の大理想、恒久不変の真理を冥想することの出来る新生活△であると、評価する。しかし生活上、老父や△破産騒ぎまでした△惣治からの仕送りに依存している耕吉の、△空想と現実との惨ましき戦をたたかふ勇士△という自己評価や、△今や現実の世界を遠く脚下に征服し△たという判断が、現実遊離の誇張に満ちた独断であることは、論を待たないのである。この、△素朴な真実な芸術△を作ろうと、老父や惣治の仕送りに依存しながら、△宇宙人生の大理想、恒久不変の真理を冥想する△、耕吉の精神態度は、「兄と弟」の、茂の収入に寄食しながら強く△真の要求△に燃えた庄作のそれとの極めて濃厚な共通性が窺われるように思われる。

第二作「悪魔」(『奇蹟』、大正元年十二月)は、善蔵の人生観・文学観を窺うことのできる、詩的な作品で

たという「後半」とに、はつきりと分れている。しかも両者の関係は、全く別々の作品に構成し直してもよい程稀薄である。「贖物さげて」という表題は、「後半」から付けられたものであるが、ここでは特に、「前半」を問題にしたいと思う。

耕吉の帰郷が、東京で食い詰めた結果であることは、前述のとおりである。しかしそれには、うらぶれた暗さとか、じゅじゅとした陰気な雰囲気とかは、少しも感じられない。それどころか、ほのかな明るささえ感じられるのである。即ち、耕吉の帰郷には、△新生活△という彼の夢が托されているのである。そして耕吉の、この新生活は、察するに、△謙遜な気持で継母の島仕事の手伝ひをして働△きながら、△自分の無能と不心得から、無惨にも離散になつて居る妻子供をまとめて△家族一掃の生活を送り、その上で△最も素朴な真実な芸術を作△ることであつたと、想われる。しかし耕吉には、帰途惣治を訪ねた時既に、△継母の手伝ひ△は、△惣治に云はれるまでもなく、成程自分の柄にはないことのやうにも思はれ△、更に帰郷後には、思つたことは何でも率直にいう性分の、△精力家△の継母は、△皮肉堅△として、彼

ある(注18)。主人公良吉は、勿論モデルは善蔵であるが、現実には憂鬱と倦怠とをしか感ずることのできない消極的な虚無的思考態度の、文学青年である。

良吉は△K△(注19)に、印刷所の二階で雑誌の校正をしながら、酒場で盃を乾しながら、楽しかつた過去に比べ現在の味気なさを愚痴つつも、芸術に対する強い信念を吐露する。「悪魔」は、彼の、この信念を中核として構成された作品であるが、その中で彼は、

△俺達は決して生活なんといふことを苦にしてはいけない。俺達がいよいよ食へなくなる、と、そこによりの以上の生活の道がちやアんと開かれて待つて居るんだ。それが事実と云ふものだ、わかり切つた事なのだ。俺達はどん底に落ちて初めて最貴最高の生命を呼吸することが出来るのだ、それは決して空想と云ふものではない。真理だ△

と、極めて無謀な楽天的意見を述べ、△信じて疑るる者には悔なし△聖書にも立派に言つてある。南無、信仰なくては叶ふまじ、俺達は一切を否定し一切を破壊してこそ初めて真の絶対境に到達することが出来るのだ△

と、続いている。良吉の、こうした信念の根拠は、彼自



身更に続けて、

△俺達は靈魂と芸術とを持つて居る種類の人間なんだ。俺達はその絶対を信じないではどうして一日だつて斯の生を続けて居られやう▽

という様に、△靈魂と芸術と▽の△絶対を信じ▽ることにあつた。それ故彼は、自己の、この信念を実現させるためには、△唯々禱▽る以外になかつたのである。ここに至ると、彼の志向する芸術は、も早や宗教的色彩を帯びてくるのである(注20)。

良吉は、学生時代(注21)を追想して、

△僕は何にも学問をしらず退つてしまつた。少しばかり覚えたのもみんな忘れてゐる。たつた、〇一

breaking heart, will not break. このテニソンの句だけが残つてゐる。ちの真白な白髪頭の先生が

おお破るべく、破り難き胸よー斯う訳をつけて呉れた。それが僕の全体の学問でちつた、おお破るべく破り難き胸よ……さうしてちの憂鬱な騒々しい動物園から放たれてまア幸福だ、と思つたのが間違ひ！そこにはアスファルトの道路と、煉瓦の建物と、生活と、人間とが溢れていた。それが悉く自分には適しない物ばかりなのだ▽

その中に、

△人間といふものは、人間の生活といふものは、もつと美しくある道理なんだと自分は信じてゐるし、それには違ひない▽という、△善哉▽の心境が描かれている。これは勿論、本能の過失から同棲することになつた、おせいのこと、一悶着起したあとの心境であるが、こつた失敗と、しかも毎日が希望のない悲惨な生活であるにもかかわらず、△すべては、人生は、生活はかう云ふものだと思ひ諦め▽ることなく、△人間といふものは、人間の生活といふものは、もつと美しくある道理なんだと▽、猶一途に△信じてゐる▽彼の意識構造には、「理想への強烈な憧憬」を、はつきりと観取することができるのである。

以上調査した、四篇の善哉の小説に登場する、彼自身をモデルにした主人公が、いずれも「理想への強烈な憧憬」を抱いていることは、も早や明らかである。しかもそれを、善哉の性格特徴として移行することも、容易であると思われる。

再び「贖物さげて」に戻ると、そこには、次の様な耕吉親子の対話が、展開されている。それは、△ある晩酒

と述べている。これによると、彼は学生時代に既に、実社会には適応できぬ、余計者としての意識を持つていたことが、はつきりと窺われる。そして彼が、ただ一筋に△靈魂と芸術と▽の△絶対を信じ▽たのは、恐らく、この余計者という、劣等感と密接な関係があると、想われる。詰り彼の、芸術に対する強固な信念は、この劣等感の代償としての優越感であると、考えられるのである。また、△一切を否定し一切を破壊してこそ初めて真の絶対境に到達することが出来る▽という、良吉の思考態度には、実生活上での犠牲を顧みないで、飽まで△真の要求▽に燃えた「兄と弟」の庄作や、△宇宙人生の大理法、恒久不変の真理を冥想する▽「贖物さげて」の耕作の態度との極めて強い親近性を、はつきりと感知することが出来るのである。

善哉の作品を、前期・中期・後期の三期に分けると、「椎の若葉」(「改造」、大正十三年七月)は、中期を代表する作品である(注22)。主人公は、△善哉▽という、実名で登場するが、この作品は、同棲している愛人△おせい▽ (注23)の問題を解決するために、鎌倉に彼女の実家を訪ね、飲酒の上で乱暴を働いた彼の、後日の心境を描いたものである。

を飲みながら▽、老父が耕吉に、△お前は今度帰る時、若し俺達がてんで構ひ附けないとしたら▽、△一休妻子供はどうするつもりだつたのか?▽と、詰問したのに対して、彼があつさり、

△「私はその時は詮方がありませんから、妻を伴れて諸国巡礼に出ようと思つてたんです。私のやうなものでは所詮世間で働いて見たつて駄目ですし、その苦しみにも堪へ得ないのです。尤も妻が一緒に行く行かないと云ふことは妻の自由ですが……」▽とか、更に、

△「子供等は欲しいと云ふ人に呉れてしまひます▽とか答える場面である。老父はこれを聞いて、ただ啞然として△黙つてしま▽うが、自己の社会的不適応性を口実にした、この言葉は、夫や父親としての全責任を回避した、常識を絶する言葉である。しかも彼の、この無責任さは、ただ酒の上での弄言などと、済ましてはおけないのである。

東京で作家修業をしていた頃、耕吉は、妻と二人の子供の預けてある△細君の実家へ▽、△恩も善理も▽考えないで、△突然▽△離縁状を送▽る(注24)。そしてそ



の動機の一つに、△僕と云ふ人間は、結局自分自身の亡霊相手に一生を送るほかには能の無い人間だらう△という、漠然とした抽象的な理由を挙げてゐる。これも、彼の生活態度の、無責任さを語る証左であるが、また彼の論理の、独断性と自己本位性とを語るものでもある。彼の、こうした性向は、細君の、

△「あなたは他人への迷惑とか気の毒とか云ふ心持が、まるで解らないんですねえ、全く平氣なんだから……」△

という言葉に、一層明確に表われていると、思われる。善蔵の出世作が、「子をつれて」であることは、上述したとおりである(注25)。これは、四ヶ月に亘る家賃の滞納のために、△家主との関係が断絶し△、遂に三百代言の介入によつて追ひ出された主人公の△小田△が、二人の子供をつれて、落着き先を求めて夜の街を彷徨するといふ梗概であるが、小田のモデルが、善蔵であることはいうまでもない。

小田の、これまでの生活は、△K△(注26)への限りない「無心」によつて、成り立つてきた。しかも彼の、無心の態度には、終始、他人の感情に無頓着な鈍感さと返却しなければならぬといふ義務觀念の欠如とが、付き

纏つてゐる。詰り、自己本位の生存本能が剥き出しになつてゐる。そのために彼は、友人達から、遂に△悪疾患者△として異物視されてしまふのである(注27)。

さきに、広津和郎氏の「神経病時代」で、善蔵をモデルにしたと想われる△遠山△が、エゴイストクな人物として描き出されていることを述べたが、ここで同時代人の善蔵評を眺めたいと思う。それには、長い、親密な交際のあつた「奇蹟」の仲間達のものが、好適と思われる。

善蔵評のはしりは、大正八年四月号『新潮』の、徳田秋声外五氏による、特集「葛西善蔵氏の印象」である。ここでは、まず相馬泰三が、善蔵の△身勝手△さを衝き、また広津氏が、△徹底的なエゴイスト△であると、率直に指摘している。更に谷崎精二氏も、善蔵が△徹底的のエゴイスト△であつたことを、のちにはつきりと述べてゐる(注28)。

以上によつて、善蔵がエゴイストであつたことに異論はない筈であるが、最後に、善蔵の作品「おせい」(「改造」、大正十二年一月)の中で、善蔵をモデルにした△私△が、△私はエゴイストだ△と述べてゐるのを、附け加えておきたい。

さきに私は、「兄と弟」の庄作の偏執性が、処世上・実生活上の劣等感と、その代償としての人生観上・文学観上の優越感と自己過重評価とに支えられてゐると述べたが、「贖物さげて」の耕吉の場合にも、この劣等感と優越感とが存在する。それは、上記の、△私のやうなものでは所詮世間で働いて見たつて駄目ですし、その苦しみにも堪へ得ないのです△という言葉や、△自分のことを、「空想と現実との惨ましき戦をたたかふ勇士ではあるまいか」と、思△う感想にも、はつきりと現われている。

常郷した耕吉は、追ひ追ひ繼母を嫌悪の対象とするやうになる。それは、彼の生活態度への辛辣な、彼女の皮肉の所為である。或る程、繼母の皮肉は、容赦のない鋭いものであるが、兎に角彼女は、素朴な悪意のない性質の働き者である。それを、△蜘蛛△や△毛虫△を見ても、△繼母の呪ひの使者ではないか△と想像する耕吉の、この必要以上の警戒心と悪意の解釈とは、やはり彼の偏執性を示すものではないかと、想われる。

大正十年に発表された小説に、「浮浪」(『国本』、五月)がある(注29)。これは、善蔵をモデルにした主人公△私△が、原稿を書くべく、友人の△内田△(注30)

を頼つて助川(茨城県)に行き、紹介された旅館に幾日滞在しても、満足な原稿が書けず、勘定も払えないために、外套と時計とを抵当にして、追ひ出されてしまふがそれにも懲りず、図々しくも内田の兄に借金して、別の旅館に行き、また追ひ出されても帰宅しようとせず、更に商人宿に行つて、羽織も袴も袴も質入れしてしまひ、それでも一枚の原稿も書けないために、進退に窮した挙句、弟からの送金によつて救出されるという梗概である。

この場合の△私△には、どうしても助川に執着しなければならぬ、客観的な理由は何一つとしてないのである。ただあるのは、△昨年の暮に死んだ従兄のこと△(注31)を小説に書かねばならぬと思ふ、一種の義務的な觀念とこのままここに滞在したら、原稿を書く雰囲気は湧くかも知れないと想ふ、主観的な希望とである。この觀念と希望とが、△私△をして容易に助川を去らしめない、理由である。やはり「浮浪」の△私△も、偏執性の所有者といえよう。

友人の伝えるゴシップに、善蔵の偏執性を語るものが二つある。

谷崎精二氏によれば、氏と徳田秋声と善蔵と三人で、△本郷の鳥屋で飯を食へた時△、秋声が、△「僕の長男



は僕に似て、少し眼尻が下つて居て困る。」と云ふと、善蔵は「直ぐ、い、女と違つて、男はどうしても少し眼尻が下つて居なくつちや。」といつたと、いわれ、秋声が、「馬鹿云ひ給へ、反対だよ。女ならいいんだ。」と「V」と「A」駁しても、善蔵は「尚承知せず、いや、さうじゃない。男は眼尻が下つて居る方が立派だ。」と云い張つた「V」といわれる（注32）。

広津和郎氏によれば、大震災のあと朝鮮人反乱のデマが鎌倉に伝わつた時、建長寺の菅原時保管長が、八竹槍を持つて出て来て、村の若者と一緒に寺の門前を守つたという話をし、管長の偉さをどこまでも主張したと、いわれる（注33）。

これらの議論のおこなわれた時の、状況とか善蔵の態度とか表情とかが、もつと詳しく分かれればそれに越したことはないが、それにしても、このいずれもが、常識外れの独断的な解釈という点で、上記の、善蔵をモデルにした作中人物の場合と同様に、善蔵の偏執性を物語るものと、いえよう。

谷崎精二氏は、「子をつれて」の中の次のエピソードから、善蔵に「被害妄想」のあつたことを指摘している。（注34）。

「仲間」（『野依雑誌』、大正十年十月）に、最も顕著である。

「不能者」（注36）は、プラトニック・ラブの対象である温泉芸者の「金弥」を、好色漢の「成瀬」に蹂躪された主人公「田口」が、芸術上での復讐を期しながらもやはり淋しい気持に沈むという梗概である。モデル問題を起した作品であるが、そのモデルは、田口が善蔵、敵役成瀬が明星派の歌人萬造寺齋である。「仲間」（注37）は、主人公「私」の作家仲間を描いた作品で、そこには文壇の人気者も下積み者も混在しているが、下積み者の主人公が、人気者の仲間「野田」を通して、本の版權の売り渡しを申込んだところ、本屋から断られ、しかも野田や他の人気者の仲間達から貶まれた淋しい気持を、下積み者の仲間達を訪ねることによつて、癒めるといふ梗概である。因みにモデルは、主人公「私」が善蔵、野田が宇野浩二である。

「子をつれて」の小田にも、「不能者」の田口にも、「仲間」の「私」にも、確かに、「侮辱された」・「貶まれた」と思ふ、被害意識の存在するのを、認めることができる。しかし彼らの、この意識が、これ以上発展することはも早やあり得ないと、想われる。というのは、彼

それは——友人「A」の父がなくなつた時、友人一同連名で香奠を贈ることになり、その能力のない小田は、名前だけ連ねて金は出さなかつた。四十九日に彼のところへ香奠返しとして送られてきたお茶の罐には大きな凹みが二ヶ所もついていた。これを見た彼は、「A」が「毎朝振り慣れた鉄重鈴で、金も出さずに「ええ憎き奴め！」とばかり、殴りつけて寄越したのだ」と解釈して、悲しくなり、せめて妻子にだけはこの恥を見せたくないと思ひ、留守をいいことに、台所ですりこ木を持ち出して、その凹みを直した——というエピソードである。

谷崎氏は、「子をつれて」を読んだ時、「奇抜な観察だと思つて、善蔵にいつて笑つたところ、い、さうかい」と云つたとき不興気に黙り込んでしまつたと、いうのである。要するに、谷崎氏は、善蔵が「作品を面白くする為めに事実を曲解し、あんな空想を弄したのだ」とばかり推察して「いたのに、実は彼にとっては実感であつたと、いうのである。これを、谷崎氏は、「被害妄想」と名附けたわけである。

善蔵の、こうした精神現象は、彼の他の作品にも現われている。「不能者」（『改造』、大正八年八月）、

らの認識態度は、感性的であつて、論理的ではなく、そのために、次から次へと連想的に発展する、いわゆる妄想体系が認められないからである。彼らには、論理の錯乱よりも、感性の錯乱を認めることができるのである。それ故谷崎氏のいう、善蔵の「被害妄想」も、普通の意味での妄想ではないのである。重疊性のない、「感性的な妄想」である。

私は、この「被害妄想」を、偏執性として片附けることもできると思ふのである。しかし、ともあれ、善蔵の感受性の、程度の鋭敏さと傷付き易さを、認めないわけにはいかないのである。

#### その二 作家志望

さきの論文（注38）で、私は、善蔵の第二回目の退道の時期を、明治三十八年五月頃と推定した。しかしそれは、善蔵の作品中の記述を基本にして推定したことなので、確証を欠くのは上述のとおりである。

この頃の善蔵を知るのは、現在に於ては、中村長作氏以外にあるまいと、想われる。中村氏は、北海道炭鉄道に勤めたのち、上京して早稲田大学に学び、卒業後永



年都新聞に在職したと、いわれる(注39)。善蔵は中村氏を、岩見沢駅で鉄道従業員として働いていた頃知り、生涯兄弟したのである。しかも中村氏は、善蔵よりもさきに上京していたので、善蔵が、退道・上京にあつたつて、氏の意見を徴しているのではないかと、思われる。

近々図らずも私は、中村氏の消息を聞く機会を得た。氏は、石川県七尾市に隠棲していたのである。私は、これまでの善蔵研究の暗黒面に光を照射すべく、二度の通信と一回の訪問を試みた。しかし氏は、頑として、八故葛西善蔵氏トノ昔日ヲ語(注40)りたくないといふのであつた。渡道から退道、上京、哲学館大学(注41)入学までの、期間には、善蔵の精神形成史上可成り重要な期間であるために、研究上空白のまま放置せねばならぬことを、私は極めて残念に思うのである。

善蔵が、一時哲学館大学に籍をおいたことは、その読者には周知の事実である。哲学館大学とは、明治二十年九月十六日井上円了の開設した、哲学館の後身で、明治三十七年四月一日上記の名称に改称され、明治三十九年六月二十八日ふたたび改称された、現在の東洋大学のことである(注42)。

とあるのを基本にして編成された、改造社版「葛西善蔵全集一第五卷(昭和五年九月)所収の年譜に、これまでに三四人が手を入れ、小山内氏自身二度も改良を加えた結果でき上つた、氏の労作である。周到緻密な小山内氏の編成したもの故、恐らく何らかの根拠があつてのこととは思われるが、その記載が、学籍簿上の事実と全く食い違つていたことは、上述のとおりである。

学籍簿には、ただ、八明治三十八年八月二十八日 大 学部第二科普通講習科に入学、八明治三十九年三月七日 無届欠席により除名となる(注44)のみで、二度に亘つて聴講生であつたという記載も、明治四十年専門部の一年或は二年への編入が許可されたという記載も、ないのである。

尤も佐藤氏によれば、善蔵と氏との初対面は、明治三十九年若葉の頃の、講義後の教室の廊下であつたと、いわれ(注45)、同じくこの頃の友人八田健一(号八紘)氏は、それ以後に佐藤氏を介して知つたように思うと、いわれる(注46)。若し事実とすれば、学籍簿記載以後の、善蔵と哲学館大学(東洋大学)(注47)との関係はどの様に解するべきであらうか。両氏の語る、善蔵との交友上での他の逸話によつても、これ以後も東洋大学と

善蔵の哲学館大学時代のことで、まず記しておきたいことは、これまでに編成された幾多の年譜記載上の事実が、東洋大学保管の学籍簿上の事実と全く異つていたということである。最も詳細で、最も信用し得る年譜は、『弘前文学』32号所載の小山内時雄氏編のものであるがそれには、善蔵と哲学館大学との関係を、八明治三十八年九月 哲学館大学聴講生となる、八明治三十九年五月 哲学館大学学部第二科第二学年聴講、八明治四十年三月二十一日 哲学館大学専門部一年二年同時に受験一年に編入されたが出席しなかつた(注48)と、記されている。この年譜は、明治四十一年九月早稲田大学の英文科に聴講を志した善蔵が、その手続きのために、哲学館大学(この頃既に東洋大学と改称)の在学証明書を取つてもらふべく、友人佐藤榮七(号塗山)氏に依頼した書簡(注45)に、

八「三十八年九月入学大学部二科聴講、此の年は十二月まで出席して其後は出ない。だから除名になつた。」再び「三十九年五月大学部二科二年聴講」四十年三月一年二年同時に専科受験す、一年の方が出来て専科二年に編入された、二年の方は失敗であつた。」それつきり出席しないので、又除名になつたんだらう(注49)。

は何らかの関係があつたと、察せられる(注48)。しかし、それはともあれ、善蔵のこの時代の年譜は、学籍簿に基いて、一応書き改めるべきであらう。

退道を明治三十八年五月頃とすれば、哲学館大学の入学が、同年八月二十八日附で許可されているので、退道から入学までの期間は、僅か三四ヶ月である。驚くべきスピードぶりである。しかし、善蔵に十六才の時一度、勉学の志をもつて半年程上京した経験のあること、社会的職業への不適応のために、北海道時代の大半は放浪生活であつたが、しかし、理想への強い憧れを抱く彼の、この放浪からの脱却を強く希う心情が、十分に察せられること、偶々この頃知り合つた中村長作氏が、向学心に燃え、さきに上京し、早稲田大学に在学していたという事情とを願望すれば、彼の退道・上京は、経済的事情のみ許せば、も早や時間の問題である。

哲学館大学を選んだ、善蔵の内部事情は、一切不明であるが、その動機の一つに、いわゆる哲学館事件の発生の結果同大学が、可成り広範囲に門戸を開放したという、外部事情を想定することができる、思われる。哲学館事件とは、未だ哲学館と称していた明治三十五年十二月十三日、教育部第一科の卒業試験の、ある学生の倫



理學の答案中に、国体の精華を損う不都合な答案があつたとして、文部省が、同校の中学校師範学校教員の無試験検定資格を、剥奪したという事件である(注49)。このために、正規の入学資格を持つ学生の志願が激減したので、学校の経営政策上無資格者の入学をも許可し、一年の講習期間を経て、正規の課程に進ませるといふ方法が講じられたようである(注50)。

上記の佐藤氏も、八田氏も、正規の入学資格を持つてゐる学生ではなかつた。佐藤氏は、当時哲学館から発行していた中学講義録で一年間勉強したところ、俄に勉学の志に強く燃えて入学したい(注51)。八田氏は、家庭の都合で石川県立第一中学校(現泉カ丘高等学校)を三年で中退したものの、文学への情熱止み難く、徳田秋声の甥太田順太郎と交友のあつた関係上秋声を頼つて上京し、偶々哲学館大学に入学することになつたと、いわれる(注52)。両氏共々、当時の哲学館大学の憔悴ぶりを回想され、同期の卒業生中、僧籍を持たなかつたのは、佐藤、八田両氏のみであろうと、いわれる(注53)。いうまでもなく両氏は、まず講習科に入学したのである(注54)。

「子をつれて」の主人公小田が、若い頃予備校に通つ

れ以前の善蔵の字歴は、捏造ということになる。しかし捏造であろうとなかろうと、哲学館大学への入学資格上では、別段問題はない筈である。というのは、善蔵が入学を許可された講習科は、正規の入学資格を持たない者に関された門戸であるから、である。しかし、これら一連の事実、哲学館大学の危機を語るものでなくして何であろう。危機とは、哲学館事件の招来した経営難である。

善蔵の如き、正規の入学資格を持たない者が、容易に正規の学生になりおさせるためには、こうした機会を掴む以外になかつたのである。

善蔵が入学を許可されたのは、上述の如く、八大学部第二科普通講習科Vである。しかし、八大学部Vといっても、当時の哲学館大学は、専門学校令による認可を受けた大学である(注59)。名称上では大学ではあるが、公式の制度上では専門学校扱いである。しかし、大学部は、五年を修業年限とし、特に八第二科に於ては国語漢文の諸科を専攻せしめVると共に、八相当の時間数を哲学、倫理方面の理解研究に課しVて、建学の特殊性を生かしつつ、大学としての機能を演ずるといふ、方針を持つていたのである(注60)。講習科は、上述の如く、修

たと描かれているように、小田のモデル善蔵も、上京のはな、一時予備校に席をおいたのではなからうか。恐らく、そこでの情報を基として哲学館大学を選んだらうと想われる。況してや講習科の学生の中には、佐藤氏の如く、不得意科目の補習のために予備校に通つた学生もいると、想われるからである(注55)。

哲学館大学以前の善蔵の字歴は、学籍簿に、八明治三十四年 高等科三年終了V、八明治三十四年 月より明治三十六年七月まで 青森県立第一中学校在Vと、記されている。しかしこれは、全く事実と反する。善蔵の出身小学校は、郷里の礎ヶ関小学校であるが、当時高等科を併置していなかつたので、彼は、尋常科四年の課程を終えると、補習科に進学し、二年の課程を明治三十二年三月卒業している(注56)。青森県立第一中学校(注57)に在学したという、八明治三十四年 月より明治三十六年七月までVの、善蔵の生活の基地は、東京・青森・北海道と点々と移動しているの、この事実、全くあり得ないことである。しかし念のために、後身青森県立弘前高等学校に照会したところ、やはり、八葛西善蔵が本校に在学したことはありませんVという解答であつた(注58)。結局、哲学館大学の学籍簿に記されている、こ

業年限一年の、正規の入学資格を持たない者への便宜的処置であつて、そこには、八普通V・八特別Vの区別があつた。前者は学級を定め、後者は随意である。それ故、哲学館大学での、善蔵の資格は、聴講生ではなく、正規の学生として登録される前の、予備学生ということができよう。

当時の哲学館大学の講師陣には、重立つたところを挙げると、哲学に井上円了、宗教学に近角常観、国文学に柴舟尾上八郎、地理学に志賀重昂などがいたが、果して善蔵は、これらの講師に聴講したであろうか。講習科に約六ヶ月在籍した果に、怠け学生という刻印を押されて除名になつた彼には、聴講しなかつたと見る方が、似合わしいように思われる。事実、佐藤氏も、八田氏も、彼を教室で見かけたことは余りなかつたと、いわれる(注61)。

明治三十八、九年頃、即ち佐藤氏、八田氏が初めて知つた頃の善蔵は、既に文学青年であつたと、いわれる(注62)。勿論、作家志望の確固とした意志があつたわけではなく、ただ漠然と、しかし一途に、文学に浮かされた青年であつたと、いふのである。



ここで、善蔵が如何にして、文学青年となつたか、また、強靱な作家志望を抱くか、その素因、影響などについて、考察したいと思う。

碓ヶ関小学校時代の恩師に、石田政蔵先生がいたこと、しかも先生に対する、善蔵の尊敬の念に當ならぬものがあつたことは、さきの論文(注63)で述べたとおりである。善蔵がつる未亡人に、**「一億を文士に仕込んだのは最初は石田さんだ」**と、たびたび語つたといわれる(注64)が、実際石田先生の、善蔵への影響力は、測り知れないものであつた。

石田先生が、履教員として碓ヶ関小学校に赴任してきてしたのは、明治三十一年十一月二十三日である。善蔵はこの時、補習科の一年であつたので、小学校時代先生に接したのは、僅か一年四ヶ月程である。

しかし石田先生は、善蔵の卒業した明治三十三年九月十八日、村の青少年の体力と精神力の向上を狙つて、「碓ヶ関養成会」という名称の、早起会を結成した(注65)。弘前には既に、伊東重(注66)を中心とする養生会「東門会」が結成されており、いわば碓ヶ関はこの分家であつた。東門会は、伊東の養生会を基として結成された会で、養生字の基調は、要約すると、生存競争に

碓ヶ関から弘前までは汽車を利用したが、その他は全部徒歩で、しかも常路は嶽温泉から岩木山に登り弘前を経て碓ヶ関までぶつ返しあるき続けたのである(注70)。善蔵一人で試みたのに、明治三十九年八月、東京から碓ヶ関まで約二百里の行程を、徒歩で帰郷した事実がある(注71)。これらいずれも、物見遊山の類ではなく、上記の実験方法と見ることができよう。

善蔵は、小説「火傷」(『文章世界』、大正八年四月)の中で、石田先生の風格を、

△先生は二十年から村に居るのである。そして全く子供等と説書と酒を相手に、禅僧のやうな独身生活を続けて来て、村の人達からも尋常で無い尊敬を受けてゐる先生である(注72)

と描いている。要するに、私に語つてくれた教え子達の石田先生評も、禅味のある深潔な人品として、敬愛の念に溢れていた(注73)。中でも花田実氏は、私信(注74)に於て、

△寡黙で厳格、ずい分ひどいと思われるような体調を加えたりしましたが、不思議と父兄から文句を言われることがなく、村の神祕のように信頼されていた。それは、その反面、外へは出さないが、深い愛情の持主

打ち勝つためには、国家でも個人でも、資力・体力・脳力を養ひ、しかも余裕あらしめなければならぬ、これを養成三力といい、それを涵養することにあつた(注67)。

丁度この会の結成された頃、肺結核で青森県立第一中学校を退学した石田先生が、伊東病院で、治療というよりはこの養生学に基いた指導を受け、やがて快癒して碓ヶ関小学校に赴任してから、今度は自分の手で養生会を創めることになつたのである。ここで再び善蔵は、石田先生の指導を受けることになつた(注68)。

碓ヶ関養生会は、別名の如く早起会であつた。石田先生の指導の下で、村の青少年が毎朝早起運動を続け、マラソンなどによる肉体の鍛錬が行われたのである。しかし、肉体の鍛錬に究極の目的があるのではなく、これを媒体として、強固な精神を育成しようというのが、この早起会の本来の趣旨であつた。それ故、肉体を故意に窮地に陥し入れることによつて、その苦境を乗り越切る強靱不屈の精神力を養おうという、実験的方法も採られていたようである。

実験的な方法の一つに、明治三十九年か四十年の、目屋の暗門滝探勝がある(注69)。これに参加したのは、石田先生と善蔵を含むそのグループ一行十名で、△往路

であつたからだろうと思われ(注75)と述べ、△上司におもねる(注76)追従性のない、誠実さを逸話を挙げて説明し、更に続けて、

△多弁ではないが、日常の会話の中には、興逸味、とほけ、禅味があつて、善蔵の作品と共通するものがあつた(注77)

と、詳細に伝えてくれた。花田氏をはじめ、教え子達の石田先生評を総合すると、その人柄は、厳格であると同時に深い愛情と抱擁力とに溢れ、しかも表裏一体の誠実さを持つ、高潔さという点に象徴されるのである。一人善蔵ばかりでなく、村人の総てが、敬愛の念を抱いて慣れ親しんだ理由も、これによつて、能く理解することができるのである。

以上の養生会を巡つての石田先生に關する話、教え子の語るその風格のうち、石田先生の、肉体を故意に窮地に陥し入れることによつて、その苦境を乗り越切る強靱不屈の精神力を養おうという、実験的な方法は、善蔵の、不如意を設定することによつて、創作意欲を馳り立てようという、創作態度・方法に、また石田先生の、日常会話の中に溢れていた、△諷逸味、とほけ、禅味(注78)は、善蔵の芸術の持味に、それぞれ強い影響を与えていること



が、望見されるのである。これによつて、上述の、「  
俺を文士に仕込んだのは最初石田さんだ」Vという、  
善蔵の言葉も、理解できる筈である。

大正十五年十二月十三日御里の新開「東奥日報」に、  
善蔵は可成り気楽な気持ちで、「少年の日」と題する談話  
筆記を、寄せている。これは、少年時代に奉公したこと  
のある、五所川原の袖家（注74）でのことを述べたもので  
あるが、その中で、

△僕が大きくなつて文学をやるやうになつた素因は  
矢張り五所川原の少年時代の生活当時に作られたもの  
と書へますねV

と、はじめて文学に関心を寄せた少年の日を回想し、続  
けて、神家の土蔵で文学書に親しんだ確録を、

△里見八犬伝なんか、ほこりをはたきはたき愛読お  
かなかつたね。夫ですつかり文芸ものに趣味をもつて  
しまつたんだ。つまり蔵の中の八犬伝が病付きで、疎  
でもない小説家になつたといふわけですよV

と、語つている。猶、当主神伊三郎氏によれば、当時土  
蔵の中には、「里見八犬伝」の他に、「世説弓張月」、  
「三国志」、「水滸伝」などがあつた筈だと、いわれる  
（注75）。して見ると、善蔵の文學眼は、神家の土蔵

の中で、戯作や中国の大衆小説によつて、なされたので  
ある。この時善蔵は、数え年十三才であつた。

「群狸州七席七題」（『中央公論』、大正十三年六月  
の第二話「鏡」の中に、八十四五の時分にV、△半年余  
りV△青森市へ丁稚小僧に行つていた頃、古本屋から  
△臨か「商人百話草」といふ本Vを買つてきて読み、更  
に△「農業雑誌」といふ雑誌を二十冊ばかり揃つたのを  
買つて来てV、△密に読んでゐた所、店の番頭さんに見  
付けられVて、不思議がられたという話が語られている  
（注76）。商家の丁稚小僧が、「農業雑誌」を、目前の  
しかも直接の必要もないのに、わざわざ古本屋から購入  
すれば、奇異に感ずるのは、殊更番頭に眼つたことでは  
なからう。この丁稚小僧即ち善蔵が、「農業雑誌」を買  
つた動機は、全くの好奇心であらうが、しかし私は、そ  
れが偶然の、しかも純粋な好奇心であつたとはいひ切れ  
ないように思うのである。というのは、私は、善蔵の母  
方の親族佐々木倉吉の読書態度との、類似性を感ずるか  
らである。即ち、この時の、善蔵の書籍選択の方法が、  
佐々木の読書態度から可成り強い示唆を受けたもののよ  
うに想われるからである。  
佐々木は、碓ヶ関村一の財産家の出で、郵便局長や、

大正四年八月不祥事件によつて失脚するまでの一年六ヶ  
月村長を勤めたが、その後は浪々の身となつて全国を放  
浪した孝句、善蔵の実弟勇蔵のところへ、その教育な生  
涯を閉じた人である（注77）。しかし、彼は、善蔵より  
五才年長で明治十五年生れの、若い頃には可成り読書好  
きの村のインテリであつた。彼の蔵書は、不祥事件のあ  
と碓ヶ関養生会に移管されたが、その時約五百冊あつた  
といわれる（注78）。現存、この蔵書は、碓ヶ関小学校  
に保管されているが、その数も十数冊に減り、多くは散  
佚してしまつた。しかし、その十数冊は、文学、哲学、  
経済学、林学、農学、伝記の、多方面に亘り、発行年月  
の古いのは明治三十一年である。（注79）

善蔵自身、この蔵書に就いて述べるところがないので、  
「農業雑誌」購入の動機に、佐々木の読書態度から示唆  
された先入観の混在の、確証は得られないとしても、私  
はこの推測が、強ち臆測の域にとどまるものではないと  
思うのである。佐々木家が善蔵の家と同じ大字内にあつ  
て、しかも親戚筋に当る関係から、善蔵がこの蔵書を、  
利用する機会は十分にあり得た筈だからである。

哲学館大学時代の友人で、善蔵と特に親交のあつたの

は、上記の佐藤、八田両氏のほか、関本素康（注80）を  
加えた三人であつた。佐藤、八田両氏は、共に明治三十  
七年四月、正規の入学資格がないために、第二科普通講  
習科に入学した。翌二十八年四月、両氏が△専門部第二  
科V（注81）第一学年に進級した時、関本が同部同科同  
学年に入学してきたのである。善蔵は、この年の八月に  
第二科普通講習科に△入を許可されたので、彼らの一年  
後費に当るわけである。

これら佐藤、八田、関本の三氏は、当時の、いわゆる  
文学青年であつた。さき関本については分明的でないが、  
佐藤氏は特に哲学に関心をもち、八田氏は中学時代から  
俳句に熱中していた、といわれる（注82）。この交友を  
とおして、善蔵の文学意識は、一層はぐくまれていつた  
のである。

当時の、哲学館大学内での文学仲間集団といへば、  
講師尾上柴舟を主宰者とする短歌の会ぐらひであつた。  
この会の結成されたのは、既に東洋大学と改称され、善  
蔵が無届欠席を理由に除名されたあとの、明治三十九年  
十一月である（注83）。十一月に結成されたのに因んで  
「霜月会」と称したが、柴舟を中心に、学生十二三人を  
会員とするものであつた。善蔵は会員ではなかつたが、



時々催されたこの会の席上で詠まれた短歌を、佐藤氏などに批評して聞かせたと、いわれ、この頃の彼は、短歌よりも専ら俳句に熱中していたと、いわれる(注84)。

善蔵は、明治四十年前後に、大町桂月らの美文と国木田独歩とに傾倒した。大体に於て、美文には明治三十八、九年頃に、独歩には明治四十、四十一年頃に、傾倒したと思われる。

後年、隨筆「三宿にて」(『時事新報』、昭和二年二月十五、六、七日)に、善蔵は嘗ての愛読書を挙げている。美文に傾倒していた頃、紅葉、露伴、柳浪をも愛読したらしい。中でも、柳浪の「松原饅頭」(『文芸倶楽部』、明治三十七年一月)から「清新な感じ」を受け、「金色夜叉」の文章のうまさに「感心」したことが記されている。

美文では、大町桂月と高山樗牛とに感心があつたように恐られるが、八田氏によれば、中でも八桂月の文章を最も愛していたといわれ、更に善蔵自身「思想では樗牛の方が優れているかも知れないが、文章では桂月の方が上だ」と語つたといわれる(注85)。桂月の美文集『花紅葉』(博文館、明治二十九年十二月、但し、塩井雨江、武島羽衣との合著)とか『黄菊白菊』(博文館、明

治三十一年十二月)とかは、この頃の善蔵の、最高の愛読書であつた。事実、明治四十年頃の善蔵の書簡(改造社版『葛西全蔵全集』第五巻所収)には、美文の影響が顕著に認められる。

以上によつて分る如く、明治三十八、九年頃の善蔵は小説でも何でも「一つの文章として愛読」するといふ、鑑賞態度で、「まだ小説家にならうとも思つてゐなかつた」のである(注86)。

独歩を愛読するに至つた縁は、八田氏の推奨であつた。上記の「三宿にて」の中で、

「自分は今の東洋大学での友人だつた八田君といふ人に読んで見給へと、「独歩集」を貸して貰つたのだつた。それから「運命」「濤声」「第二独歩集」悉く耽読したものである」

と、善蔵も述べている。善蔵の独歩鑑賞の態度は、さきの小説でも何でも「一つの文章として愛読」するといふ、態度とは異なるが、読んだ作品をとおして、その舞台となつた土地への強い憧憬を抱くといふ、可成り趣味的なしかも情熱的な態度であつた(「三宿にて」)。

明治四十年の夏二ヶ月(七月十三日から九月七日まで)を、善蔵は、都廳を逃れて、鎌倉建長寺前の竜王窟(注

87)に送つた。「三月の日記」(『新潮』、大正八年四月)では、この理由を、 $\Delta$ 失恋 $\nabla$ (注88)による逃避行と述べているが、この三月発表された、独歩の詩「鎌倉妙本寺懐古」(『新古文林』)を読んだ(注89)ことも、

善蔵に、この鎌倉行きを思い立たせる動機の一つになつたと、想われる。ここで彼は、独歩の「濤声」を読み、本当の意味での処女作「商人宿」を書いた(「三月の日記」)。「商人宿」は破り棄てられたが、竜王窟での二ヶ月の生活は、初めて創作に彼が手を染めたという意味で、意義のある生活であつた。

明治四十一年独歩が、病篤きを得て、神奈川県茅ヶ崎の、南淵院の病床にあつた時(二月三日から六月二十三日まで)、善蔵は、中村長作氏と連名で見舞状を送つたといふ(「三宿にて」)が、また、この頃は、将来作家たるべく、生涯師事した、徳田秋声に弟子入りするのである。

善蔵が秋声に弟子入りしたのは、紹介者佐藤氏によれば、明治四十一年五月頃の或る日の夕方であつたと、いわれる(注90)。当時文壇は、自然主義文学全盛時代で秋声も亦その動きの中の作家として注目されつつあつたが、善蔵が秋声に弟子入りした動機に、自然主義文学意

識があつたかという点、決してそうではない。善蔵の場合、それ以前の状態であつた。独歩の文学の、抒情に魅せられていた時代であつた(注91)。

秋声への弟子入りの最初の手懸りは、八田氏にあつた。氏は、上述の如く秋声と同じ金沢の出身で、秋声の甥太田順太郎と交友のあつた関係から、秋声を頼つて上京し、出入りしたといふ、本郷(現文京)区東片町の禪寺仙龍寺の一室を借りて自炊生活をしていた頃、同じくそこで生活していた佐藤氏を秋声に紹介したと、いわれる(注92)。

善蔵の弟子入りは、上述の如く、明治四十一年であるが、この年の三月郷里で結婚した彼が、四月単身上京すると、佐藤氏にはつきりと、 $\Delta$ 将来作家として立ちたい $\nabla$ と、述べたと、いわれ、そこで氏の知る手近な作家秋声に紹介したものと、いわれる(注93)。

善蔵と秋声との師弟関係は、佐藤氏によれば、秋声の文学論、創作談、文壇の話などを聞く程度で、善蔵が原稿の批判を乞うたことはないといわれる(注94)。

秋声に弟子入りした年の九月、善蔵は、早稲田大学英文科の聴講生になつた。佐藤氏宛の書簡(注95)には、九月十七日、聴講科目六科目以内という条件で、英文科



三年の聴講を許可されたとあるが、学校にその記録が保管されていない(注96)ので、はつきりとは分り兼ねる。

善蔵が早稲田の英文科に聴講を志したのは、佐藤氏によれば、坪内逍遙のシエイクスピアの講義に心ひかれたためであると、いわれる(注97)。しかし聴講生としての善蔵の、学生生活の様子は、詳らかではない。ただ、その片鱗を窺うことのできるのは、「悪魔」の中の、八白髪頭の先生(増田藤之助)のテニソンの詩の講義を懐かしむ、八良吉(善蔵)の回想のみである。

秋声との関係で注目すべきは、相馬御風に紹介されたことであろう。その時期は、凡そ秋声に弟子入りした明治四十一年五月頃から茨城県の大洗に赴く翌四十二年五月六日までの、頃である(注98)。御風は、明治三十九年早稲田の英文科を卒業するや、直ちに藤村抱月主宰の第二次『早稲田文学』の編集に携わり、多くの自然主義的な評論で気を吐いていた(注99)。当時の文壇は、上述の如く、自然主義文学の全盛期で、『早稲田文学』は田山花袋編纂の『文章世界』と共に、その牙城の齔があつた。苦勞人の秋声は、弟子の将来を思つて、新進評論家でしかも有力文芸雑誌の編集者である、御風に紹介したのであろう。善蔵は御風に、文壇に登場するまで、原

解がましい態度への移行の中に、次第に切迫していった善蔵の精神の動向を、はつきりと説みとることができるのである(注105)。

大洗から帰京後間もなくの、光用宛の書簡(注106)の中で、善蔵は、

△半ヶ年の放浪は何をもたらさなかつた。

僕にしては放浪其物が価値があつたと言へる丈だ。全く此度は命がけて自分を主張し実行したのだ。僕にも生涯二度と、斯んな事はあるまいと想はれる。これも幸か不幸か亡ぼされるに至らなかつた。却而自分の運命を征服し得たやうな氣もする。半ヶ年の放浪は、自分の周囲一運命との苦しい戦闘であつたのだ。楯京して君の端書も読み、友人の嘆声も聞いた。つくづく感ぜられる、文芸の前には自分は勿論、自分に附随した何物をも犠牲にしたいと△

と述べている。この文面には、上述の開き直つたふてぶてしさと同時に、非情な、しかも逞ましい程強固な作家精神が漲っている。善蔵は、この半ヶ年に亘る大洗滞在によつて、創作上殆ど収獲を得ることはできなかつたがしかしこの期間は、作家として立とうとする、不動の意志の確立されたという意味で、彼にとつては極めて貴重

稿の掲載や死入り込みを依頼していたよりである(注100)。しかし、御風との関係でもつとも銘記すべきは、雜司谷の御風の家で催されていた、モーパッサン研究会に出席し、同家に寄寓していた光用穆(みつもちきよし)を知つたことである(注101)。というのは、この光用をおとして舟木重雄を知り(注102)、舟木によつて谷崎精二、広津和郎、相馬泰三氏らの、いわゆる「奇蹟」の仲間」に紹介されていたからである。

さきにも少し触れた如く、明治四十二年五月六日、善蔵は創作を志して、茨城県大洗海岸の小林楼に赴いた。滞在期間は、善蔵自身が大洗開闢以来△の△長つ尻△という(注103)如く、同年十月十日頃までの、約六ヶ月間である。

小林楼の主人吉川卯之吉氏は、明治十二年生れで、當時三十一才(救え年)であつた。氏は、善蔵のこの六ヶ月間の生活を、読書と創作と散歩と酒とに明け暮れた生活と、いわれる(注104)。しかし善蔵の精神状況は、この間一様であつたわけではない。友人(佐藤、光用両氏)宛書簡の、素直な態度から開き直つたふてぶてしい態度への、また善父平野弥荒宛無心状の、率直な態度から弁な時期であつたわけである。

善蔵の作家志望は、彼の性格と没落した家に対する彼の根強い執着などから、自然の成り行きと想われる(注107)が、それはともあれ、彼の、いわゆる処女作「哀しき父」(『奇蹟』、大正元年九月)のテーマは、大洗引揚げ後間もない頃の光用宛書簡の中に、既に現われているのである。

以上に於て、善蔵の性格を形成する要素としての、「理想への強烈な憧憬」・「エゴイズム」・「偏執性」の三つの性格特徴の存在を実証し、作家志望の経緯を調査したが、これらが、善蔵の精神形成、就中人生観・文学観の形成に、如何なる役割を演じたかを、追ひ追ひ考察していきたいと思う。

注1 茂のモデル勇蔵は、大正七年二月帰郷する頃、新橋の運送店に勤めていた。事実と小説と違ふのはこれぐらいのものである。

注2 谷崎精二「葛西善蔵追憶記」(『新潮』、昭和三十九)、広津和郎「葛西と自分と」(『文芸王国』



昭3・9)、など。

注3 △要求V、△欲望V、△願望Vなど、いろいろな表現がなされているが、特別に使い別けはなく、同一の意味内容を表わしている。

注4 庄作のいう△真の要求V、△永遠の要求Vの実体は、善蔵の人生観・文学観のそれと殆ど一致すると思われる。

注5 これと大略同じ言葉が、庄作の口から、上京したばかりの茂に向つて述べられている。

注6 サニーニズムは、ロシアの作家アルツイバシエフの小説「サーニン」からでた用語で、人生の意義を自然の肉体的欲求の満足にあるとする考え方。

注7 「小さな犠牲者」(『婦人公論』、大9・6)。  
但し、「遊動円木」(『雄弁』、大8・10)では主人公△私Vが△T V(広津和郎)に向つて、△サーニン主義者Vとして△T Vを描いたことはないと、弁明している。

注8 『荆棘の路』(新潮社、大7・5)

注9 「神経病時代」(『中央公論』、大6・10)、「師崎行」(『新潮』、大7・1)

注10 「チエーホフとアルツイバシエフ」(大2・3)

注21 早稲田大学の英文科の聴講生であつた明治四十一年九月頃のこと。後述。

注22 △おせいV以外すべて実名。善蔵のはじめての口述小説。

注23 モデルは浅見ハナ氏。善蔵の愛人。

注24 事実、善蔵もつる、未亡人に離縁状を送つたことがあるといわれる。その時期は、大正四年一月頃である。1以上、昭和三十六年八月十一日づる未亡人の筆者への談話。

注25 大正六年八月牛込区天神町七十九番地の借家立退きの事情を書いたもの。

注26 モデルは相馬泰三。

注27 「奇病患者」(『国民評論』、大6・4)の主人公(善蔵)も、友人達から、小田と同じく異物視されている。

注28 「葛西善蔵論」(佐藤春夫、宇野浩二監修編纂『近代日本大正作家論』下巻所収 小学館 昭18・1)、ほか。

注29 大正九年二月頃のこと素材。未詳。

注30 佐々木倉吉のこと。後述

注32 「葛西善蔵追憶記」(『新潮』 昭3・9)

注11 「アルツイバシエフ論」(『早稲田文学』、大6・5)、「アルツイバシエフの生命観」(『早稲田文学』、大6・6)

注12 大正元年九月から大正二年五月まで。詳しくは、章を改めて述べることにする。

注13 明治四十五年の光用穆宛の書簡の殆ど全てから窺うことができる(改造社版全集第五卷)。

注14 宇野浩二「葛西善蔵論」(『新潮』、大8・7)参照。

注15 モデルは白樺派の文学者達1中でも、志賀直哉、武者小路実篤1と想像される。

注16 モデルは武者小路実篤と想像される。

注17 大正四年三月から同年十一月頃までのことがかかっている。

注18 注20参照のこと。

注19 モデルは舟木重雄。同人雑誌『奇蹟』発刊の中心人物。

注20 善蔵の書簡(舟木重雄宛、大4・10・22)にも、△僕らの芸術は最早自分々々の功名利達の為ではない。宗教的、信仰的世界の建設にあるVというのがある。

注33 「年月のあしおと」第二十五回「六十六 葛西善蔵の「蠶く者」」(『群像』 昭38・1)

注34 注32に同じ。その他でも述べている。

注35 モデルは谷崎精二氏。

注36 大正八年六、七月頃の信州別所温泉でのできごとを書いたもの。

注37 大正十年五、六、七月頃のことを書いたもの。

注38 「葛西善蔵の研究(1)環境と生い立ち」(『名古屋大学国語国文学』13 昭38・11)

注39 昭和三十六年八月十四日北川清蔵氏の筆者への談話。

注40 昭和四十年一月二日附の筆者への私信。

注41 のちの東洋大学。後記。

注42 詳しくは『東洋大学創立五十年史』(東洋大学 昭12・11)参照のこと。

注43 明治四十一年九月十四日附(改造社版全集第五卷)△大学部第二科普通講習科Vについては、あとで説明する。

注45 昭和三十七年五月十七日附の筆者への私信、および昭和三十九年十二月二十七日の筆者への談話。

注46 昭和四十年一月五日の筆者への談話。



注47 哲学館大学、東洋大学の名称を、明治三十九年六月二十八日を境として使いわけることにする。  
注48 「霜月会」についてのこと。後記。  
猶、改造社版全集第五巻所収の佐藤健栄（八田健一、佐藤栄七の両氏）宛書簡（明40・4・21）には、八余は再び教室に於て兄等に見えんとすVとある。

注50 無資格者の入学を許可した、講習科は、『東洋大学創立五十年史』の学制の変遷を記した箇所で見られていない。但し、明治三十七年十二月発行の『哲学館大学同窓一覽』では、確かに、八講習科Vの存在したことが、見えるが、大正三年二月発行の『東洋大学同窓一覽』では、消えている。  
注51 昭和三十九年十二月二十七日の筆者への談話、および昭和四十年一月十八日附の筆者への私信。  
注52 昭和四十年一月五日の筆者への談話、および昭和三十九年十二月二十七日佐藤栄七氏の、および昭和四十年一月五日八田健一氏の、筆者への談話。

注53 昭和三十九年十二月二十七日佐藤栄七氏の、および昭和四十年一月五日八田健一氏の、筆者への談話。  
注54 両氏とも、明治三十七年四月、第二科普通講習科に入学。  
注55 佐藤氏は、英語と幾何が不得意であつたため、講習科入学後正則英語学校に通つたと、いわれる。昭和三十九年十二月二十七日の筆者への談話。  
注56 『学校要覧』（碓ヶ関小学校、昭29・9）参照。善蔵の学籍簿は、明治三十八年五月三十一日の火事で焼失。  
注57 青森県立弘前高等学校の前身。  
注58 昭和四十年二月三日附の返信。  
注59 注42に同じ。  
注60 注42に同じ。  
注61 注53に同じ。  
注62 注53に同じ。  
注63 注53に同じ。  
注64 竹内俊吉「葛西善蔵氏の人生観と作品と故郷と」（『東奥日報』昭3・12・6）。但し、筆者も昭和三十八年七月二十七日つる未亡人に直接確認。昭和四十年一月二日附の花田実氏から筆者への私信。氏は石田先生の後継者。  
注66 初代の青森県立病院院長。のち伊東病院を開設の

たわら、代議士、弘前市長を勤めた。  
伊東重「養生哲学通俗講話」（『養生学叢書』所収 養生会 昭29・3）参照。  
注67 明治三十三年初出京説を採れば、この会で善蔵が石田先生の薫陶をうけたのは極めて短い期間になる。やはり当時の状況などから考えて、明治三十五年初出京説を採るべきであろう。  
青森県中津軽郡西目屋村にある。  
注69 「酒と放浪の作家 葛西善蔵」(12)（『陸奥新報』昭31・5・22）（この回の担当者は花田実氏）  
注70 「湖畔手記」（『改造』大13・11）などに、この時の思い出が書かれている。  
花田実、佐々木太郎（善蔵の従弟）氏らの筆者への談話。昭和三十八年七月二十五日。  
注71 昭和四十年一月二日附。  
伯母しま（父卯一郎の姉）の嫁ぎ先。  
注72 昭和三十八年七月二十五日の筆者への談話。  
注73 八青森Vとあるが、実際は五所川原の神家に奉公したときのこと、思われる。  
注74 「埋葬そのほか」（『改造』大10・7）の「前川」のモデル。不詳事件の実体は、はつきりとは分り

注75 注76 注77

注78 昭和三十六年八月十一日花田実氏の筆者への談話。  
注79 碓ヶ関小学校に保管されている、佐々木蔵書の中で、もつとも古いのは、高瀬武次郎著『日本之陽明学』（明31・11）であつた。  
注80 昭和十年没。  
注81 専門部第二科の特色は、八国語漢文の諸科を教授すVると共に、八相当の時間数を哲学、倫理方面の理解研究に果Vすという点にあつた（『東洋大学創立五十年史』）。

注82 昭和四十年一月十八日附佐藤氏の、および昭和四十年一月十七日附八田氏の、筆者への私信。  
注83 注53、注82に同じ。  
注84 昭和三十九年十二月二十七日佐藤氏の筆者への談話。  
注85 注46に同じ。  
注86 「三宿にて」から引用。  
注87 八おせいVこと浅見ハナ氏の祖父杉村正造経営。不詳。  
注88 「三宿にて」に、八妙本寺のことをうたつた詩も

注89



注90 その当時自分の愛誦したものであつたVとある。筆者への、昭和三十七年五月十七日附の私信、および昭和三十九年十二月二十七日の談話。

注91 明治四十一年もやはり独歩に傾倒し、その鑑賞態度は、上述のものと変らなかつた。

注92 注46に同じ。

注93 注90に同じ。

注94 注84に同じ。

注95 明治四十一年九月十七日附（改造社版全集第五卷所収）

注96 昭和四十年二月四日附の八第一文学部事務主任V名による返信。

注97 注94に同じ。

注98 光用穆を知つたのは、御風のところである。その光用にはじめて手紙を出した（但し、現在見得るもので）のは、善藏が大洗へ行つてからの、明治四十二年九月一日のことである。（改造社版全集第五卷）

注99 多くを『黎明期の文学』（新潮社、大1・9）で見ることが出来る。

注100 谷崎精二氏によれば、「贖物さげて」などが、御

風に依頼して掲載された作品であるといわれる（『放浪の作家―葛西善藏評伝―』）。のち、新聞記者となつた。

注101 注19参照。

注102 明治四十二年九月二十七日附光用宛書簡（改造社版全集第五卷）

注103 昭和四十年三月二十二日吉川卯之吉氏の筆者への談話（但し、病床のため氏の二女坂本たみ氏を介して聞く）。

注104 大洗滞在中に出した、改造社版全集所収の書簡を資料とする。平野弥亮は、つる、未亡人の実父。

注105 明治四十二年十月二十三日附（改造社版全集第五卷）

注106 善藏の作家志望は、さきの「葛西善藏の研究（一）環境と生い立ち」で指摘した、彼の、家運挽回の強い志と家系についての誇りと、性格上からの

注107 自然の帰結である社会機構内での余計者意識との延長線上の交点として考えられると、恐われる。しかし、内部現象であるのと資料不足のために、想像の域を出るものではない。

八附 記V

新しく、吉田幸一氏、八田健一氏、吉川卯之吉氏のお世話になつたので、記して謝意を表します。

執筆者紹介

黒部 通善	名古屋大学文学部大学院学生
中西 達治	愛知県立一宮高校教諭
大森 澄雄	愛知県立尾北高校教諭
小川 直子	